

資料

在宅高齢者の外出行動に関する調査研究 — 遠出外出志向性および危険行動傾向の関連要因 —

金光義弘*¹ 進藤貴子*¹ 武井祐子*¹ 水子 学*¹ 三野節子*²

問題と目的

高齢化社会が急速に進行する現在、地域における高齢者の生活スタイルにも多様性が顕著になっている。例えば、家族や仲間とのコミュニケーション量の減少や、身体機能の衰えと交通社会の煩雑化に伴う外出行動の抑制などによって孤立化するケースが増加する一方、健康な身体と運動機能を駆使して歩行や自転車、あるいはバイクや自動車を活用して行動半径を広げ、社会化を図る高齢者も少なくない¹⁾。前者はいわばネガティブな外出行動であり、後者はポジティブな外出行動といえよう。こうした変動性に富んだ高齢者の外出行動における多面的な要因を分析することは、心身の健康と安全な生活を維持増進する高齢者におけるQOLの諸策に対するヒントを得るうえで必要である²⁾。特にポジティブな外出行動に関する分析に基づく提言は、健全な高齢化社会を築くうえで有意義であり、かつ急務であると考えられる^{3,4)}。

ところが高齢者のポジティブな外出行動は、本人自身の転倒や障害物との接触などのもとより、自動車や自転車などの乗り物を運転することによる交通事故等の危険を伴うものである⁵⁻⁷⁾。したがって従来の外出行動に関する調査や研究は、専ら高齢者が危険を回避するために必要な安全教育や指導法に向けられるものが多かった⁸⁻¹⁵⁾。逆に高齢者の多様な生活スタイルとの関連性において、日常的な外出行動実態や環境要因を分析した研究は数少ない^{16,17)}。

一方、在宅高齢者に関しては、外出行動でいえば閉じこもりなどのネガティブな側面における環境面や心理面からの実態的調査^{18,19)}はなされているが、日常生活場面での外出行動を基軸としたポジティブ面も含んだ背景要因を分析した研究も多いとはいえない²⁰⁾。ここで必要なのは、在宅生活を送っている一般的な高齢者を対象にして、日常生活場面での様々な外出行動を規定する諸要因の分析と、彼らの

安全や幸福などを説明する変数との関連性を求める調査的研究であろう。

そこで考えられる調査研究の一つの方向性は、在宅高齢者の日常的な外出状況を調べるに際して、一般的な日常生活やQOL、さらには健康や安全に関する意識面と外出行動傾向との関連性を求める環境心理学的な分析の試みである。ただしその場合、高齢者の外出行動を量(頻度、時間、距離など)と質(目的、手段、同行者など)の両面において捉える必要があるが、その多様性の故に規定要因や関連要因を特定するのは容易ではない。したがって本研究では、高齢者の外出行動を明確に反映する変数として、「遠出外出志向性」を設定することにした。この変数は、高齢者が乗り物を利用して比較的遠くまで出かけようとする欲求および事実、その困難性などの質問に基づいて、志向性の高低として定義することができる。それとともに高齢者の外出行動に伴って想定される危険性に注目して、彼らの道路上における「危険行動傾向」をもう一つの目的変数として設定した。

その上で、これら二種類の外出行動変数に関連する高齢者に特有な要因を抽出することを目的とした。それらの要因として、特に高齢者自身による健康評価および視力等の身体的健康、生活志向性、他者依存性、さらに生活満足感等の要因との関連性が予測される。かくして高齢者にとって適正な外出行動の範囲や方法を含め、彼らの健全で安全かつ快適な外出行動を確保するための基礎資料が得られることが期待された。

方 法

1. 調査対象者および調査票の配布と回収

岡山県下に在住する60歳以上の在宅高齢者500名に対して、調査票を配布した。配布に当たっては、県下各地域の交通指導協助力員による在宅高齢者訪問指導の際に、直接本人への手渡しを依頼した。

回収は郵送法を採用し、被調査者による自主的回

*1 川崎医療福祉大学 医療福祉学部 臨床心理学科 *2 川崎医療福祉大学大学院 医療福祉学研究所 臨床心理学専攻 (連絡先) 金光義弘 〒701-0193 倉敷市松島288 川崎医療福祉大学

答を尊重した。調査票を返送した者は343名で回収率は68.6%であった。そのうち性別が明らかなものは316名、そして質問項目によって回答に欠損があるものを除くと、最終的なクロス集計に耐えうる有効回答者数は306名(男性178名、女性128名、平均年齢は72.9歳(SD:5.63))であった。

2. 調査票の構成

調査票の標題は「在宅高齢者の外出および在宅状況の調査」であった。質問項目はフェイスを含め5つのパートから成っていたが、ここに報告する遠出外出行動および外出危険行動傾向に関する質問項目は以下の通りであった。

まず「遠出外出志向性」に関する項目は4つで、外出欲求の有無、遠出の頻度、遠出の楽しみ、遠出の不安であった。次に「外出危険行動傾向」に関するものは4項目で、道路横断状況、信号遵守、安全確認、歩行の安全度であった。なお関連変数として、「健康評価」に関する5項目(自己評価, 通院, 視力, 聴力, 記憶), 「生活志向性」に関する2項目(行動志向性, 対人志向性), 「他者依存性」に関する3項目(情緒的依頼心, 社会的自信欠如, 自律の主張), 「生活満足感尺度(LSIK)」が加えられた。

3. 分析方法

遠出外出志向性と高齢者の内的要因との関連性に関するカテゴリー変数については度数に基づく χ^2 検定を行い、高齢者の危険行動傾向と健康評価との関連に関する連続量変数については分散分析およびt検定を併用した。なお遠出に関する変数と内的要因変数とのクロス集計の際、項目毎の回答における欠損が認められるデータについては、その都度分析対象から除外した。したがって「健康評価」等の内的要因変数によってNの値に差が生じた(193~256)。

結 果

1. フェイスの概要

対象者の全体像を把握するためにフェイスの整理を行い、項目別の相対度数(%)を表1にまとめて示した。今回の調査対象者は男性が女性をやや上回り、70歳代が最も多かった。職業を持たない者が多く、夫婦を含めた家族と同居する者が圧倒的に多数で、独居者は1割であった。また通院状況や日常生活の困難については、6割が通院しているものの日常生活の動作上で困難である者はわずかに1割強であった。これらと関連して、遠出に限らず日常の外出行動についてみると、9割以上の者が外出欲求を有しており、かつ7割以上が実際に週に3日以上外出している標本であることがわかった。

表1 フェイスのまとめ

項目	度数	%	
性別 (N=306)	男性	178	58.2
	女性	128	41.8
年齢 (N=304)	60-69歳	88	28.8
	70-79歳	181	59.2
	80-89歳	35	11.4
現職 (N=295)	有	85	28.8
	無	210	71.2
同居家族 (N=288)	有	258	89.6
	無	30	10.4
通院 (N=285)	有	187	65.6
	無	98	34.4
日常生活動作の困難 (N=306)	有	48	15.7
	無	258	84.3
外出欲求 (N=235)	高	211	89.8
	低	24	10.2
外出頻度 (/週) (N=297)	0日	17	5.7
	1-2日	68	22.9
	3-5日	125	42.1
	6日以上	87	29.3

2. 高齢者の遠出外出志向性と内的要因との関連性
外出欲求を有して遠出の頻度が多く、遠出を楽しみにし、遠出の不安がないと答えた者を遠出志向性高(H)群、その逆を答えた者を遠出志向性低(L)群、その中間を遠出志向性中(M)群と分類し、高齢者の内的要因との関連性を求めた。内的要因として、「健康自己評価」、「生活志向性」、「他者依存性」、そして「生活満足感(LSIK)」を採用し、その結果を表2に一括して示した。明らかになったことは以下の通りである。

表2 高齢者の遠出外出志向性と内的要因との関連性

		遠出外出志向性 [人(%)]			検定結果 χ^2	
		L	M	H		
健 康 評 価	健康度自己評価 (N=253)	L	30(11.9)	15(5.9)	5(2.0)	30.91***
		M	37(14.6)	67(26.5)	28(11.1)	
		H	18(7.1)	24(9.5)	29(11.5)	
通院 (N=250)	有	63(25.2)	69(27.6)	31(12.4)	9.12**	
	無	21(8.4)	36(14.4)	30(12.0)		
視力 (N=255)	良	39(15.3)	67(26.3)	48(18.8)	14.28***	
	悪	46(18.0)	40(15.7)	15(5.9)		
聴力 (N=255)	良	49(19.2)	73(28.6)	55(21.6)	13.79***	
	悪	36(14.1)	33(12.9)	9(3.5)		
記憶 (N=255)	良	15(5.9)	26(10.2)	21(8.2)	4.93 †	
	悪	70(27.5)	81(31.8)	42(16.5)		
生 活 志 向	行動志向性 (N=229)	安楽	38(16.6)	45(19.7)	19(8.3)	5.50 †
		積極	38(16.6)	48(21.0)	41(17.9)	
	対人志向性 (N=229)	独自	41(17.9)	48(21.0)	28(12.2)	n.s.
		親和	35(15.3)	45(20.0)	32(14.0)	
他 者 依 存	情緒的依頼心 (N=194)	L	33(17.0)	52(26.8)	30(15.5)	n.s.
		H	26(13.4)	38(19.6)	15(7.7)	
社会的自信欠如 (N=194)	L	28(14.4)	48(24.7)	33(17.0)	7.50*	
	H	31(16.0)	42(21.7)	12(6.2)		
自律の主張 (N=194)	L	28(14.4)	38(19.6)	23(11.9)	n.s.	
	H	31(16.0)	52(26.8)	22(11.3)		
LSIK得点 (N=242)	L	52(21.5)	62(25.6)	25(10.3)	11.38**	
	H	24(9.9)	42(17.4)	37(15.3)		

† p<.10, *p<.05, **p<.01, ***p<.001

①高齢者の遠出外出志向性と密接に関連する要因は健康に関する自己評価である ($\chi^2(4)=30.91, p<.001$)。すなわち遠出外出志向性の強い者は、視力、聴力、記憶において健康であると認識しており、全体としての自己評価も高い。②遠出外出志向性の強い者は、生活における方向性が行動志向的傾向にあることが認められる ($\chi^2(2)=5.50, p<.10$)。③他者依存性との関連では、特に社会的自信欠如者の遠出外出志向性が低い ($\chi^2(2)=7.50, p<.05$)。④遠出外出志向性の低い者は生活満足度も低い ($\chi^2(2)=11.38, p<.01$)。

3. 高齢者の危険行動傾向と健康関連要因との関連性

高齢者が自らの健康をいかに評価しているかという認識が、外出行動に対する危険意識に反映する程度を分析するために、健康に関する評価項目毎の外出に対する危険意識度を算出し、表3に示した。健康評価に関して3水準のものは1要因の分散分析を、それ以外はt検定を施した。明らかになったことは以下の通りである。

①高齢者自身が評価する自分自身の健康度は外出行動の危険意識に反映する傾向がある ($F(2,248)=1.80, p<.10$)。すなわち健康度の自己評価の低い者は外出時の危険意識は低いことがうかがえる。②視力や聴力に衰えを感じている者ほど外出時の危険意識度は高い ($t(251)=4.02, p<.001, t(251)=3.37, p<.001$)。③記憶力の衰えを感じている者の外出時の危険意識度は低い傾向がある ($t(251)=1.57, p<.10$)。なお通院の有無は外出危険意識について有意な関連は認められなかった。

考 察

本研究の対象となった在宅高齢者は70歳代が半数以上を占め、約9割が家族と同居しており、また病院通いはしていても日常生活上の困難は感じていない者が多

かった。いわば行動レベルの高い標本であったために、外出に対する意欲は強く、実際の外出頻度も高く、したがって外出に対する満足感も高い傾向がうかがえた。これは今回の質問票の配布要員を地域の交通指導協助員に依頼したことから、日頃から外出行動が確認されやすい在宅高齢者が対象者として抽出された可能性がある。しかし標本に偏りがあったとはいえ、比較的元気な高齢者の外出行動傾向や危険意識の背景要因を調査する対象として、目的に沿っていたものと考えられる。

本研究の目的は在宅高齢者の二種類の外出行動変数「すなわち『遠出外出志向性』および『危険行動傾向』と高齢者特有の内的要因との関連性の有無を確かめることであった。前者については高齢者の健康評価の高さ、生活における行動志向性や社会的自信の強さが関係しており、やはり遠出志向性の高さは生活満足感とも関連していることが明らかになった。したがって在宅高齢者の外出行動の分析に際して、遠出外出志向性が高齢者特有の諸要因との有意な関連性を持つという予想が支持された意義は大きい。今後は在宅高齢者の外出行動を調査する場合、この行動指標を有効に用いることができると考えられる。

さらに後者に関しても当初の予想の確認に加えて、交通場面での高齢者の危険行動傾向が、自らの感覚機能の能力を含む健康面に関する自己評価と関連するという結果が得られたことは、今後の高齢者の外出行動における安全対策に有効な示唆を提供すると考えられる。

本研究は平成13-14年度川崎医療福祉大学プロジェクト研究費の助成を得て行われた。また本プロジェクト研究は平成14年度の日本心理学会第66回大会において、三連研究^{21,22,23})として発表された。なお標記の連名研究者以外に、資料分析に当たり森本祐子氏(現在:倉敷児童相談所)と福永夕紀子氏(現在:文教女子大学大学院)の協力を得た。記して感謝する。

表3 高齢者の危険行動傾向と健康との関連性

		外出危険意識度 (SD)		検定結果
健康 評 価	健康度自己評価 (N=251)	L	1.70 (1.68)	F(2,248)=1.80 †
		M	2.04 (1.62)	
		H	2.29 (1.83)	
	通院 (N=247)	有	2.05 (1.64)	n.s
		無	1.88 (1.78)	
	視力 (N=253)	良	1.63 (1.38)	t=4.02*** (df=251)
悪		2.55 (1.96)		
聴力 (N=251)	良	1.72 (1.36)	t=3.37*** (df=249)	
	悪	2.64 (2.16)		
記憶 (N=253)	良	1.69 (1.58)	t=1.57 † (df=251)	
	悪	2.06 (1.70)		

† p<.10, *P<.05, **p<.01, ***p<.001

文 献

- 1) 田尾雅夫, 高木浩人, 石田正浩, 益田圭: 高齢者就労の社会心理学. 初版, ナカニシヤ出版, 京都, 2001.
- 2) 進藤貴子: 高齢者の心理. 初版, 一橋出版, 東京, 1999.
- 3) 金光義弘: 高齢者の交通社会参加を考える. 事故の心理・安全の心理, 第2版, 星雲社, 大阪, 92-99, 2004.
- 4) 金光義弘: 地域における交通安全. 事故の心理・安全の心理, 第2版, 大阪, 星雲社, 190-197, 2001.
- 5) 金光義弘: 高齢者の交通死傷事故における背景要因の検討 — 事故の被害者と加害者の両面調査から. 交通心理学研究, 11(1), 9-21, 1995.
- 6) 金光義弘: 運転者の視覚機能における動体認知測定の試み — 高齢者に対する動体視力検査の再検討を通して. 交通心理学研究, 15(1), 9-21, 1999.
- 7) 金光義弘: 高齢者交通事故の調査・研究. 事故の心理・安全の心理, 第2版, 星雲社, 大阪, 82-91, 2004.
- 8) 江上嘉実: 自動車学校における高齢者教育. 交通安全教育, 日本交通安全教育普及協会, 377, 11-15, 1997.
- 9) 茨城県交通安全協会, 茨城県警察本部交通部: 茨城県における高齢講習の運転適性診断データ等の分析研究. 高齢ドライバー運転適性プロジェクト報告書, 茨城県, 2001.
- 10) 石井善一: 高齢者の交通事故を減らすためのシルバーリーダーの養成とその活用. 交通安全教育, 日本交通安全教育普及協会, 377, 6-10, 1997.
- 11) 鈴木春男: 高齢者の事故はこうして防ごう. 人と車, 全日本交通安全協会, 518, 16-27, 1997.
- 12) トヨタ自動車社会文化室: 高齢ドライバーの意識と実態 — もっと知りたい・知って欲しい. トヨタ自動車株式会社, 東京, 1997.
- 13) 和田浩明: 高齢者交通安全教育の課題と様々な取り組み. 交通安全教育, 日本交通安全教育普及協会, 377, 18-23, 1997.
- 14) 矢吹圭造: インストラクターから見た高齢者への交通安全教育. 交通安全教育, 日本交通安全教育普及協会, 377, 15-18, 1997.
- 15) 山田卓生, 伊藤文夫, 清水浩志郎, 鈴木春男, 丸山一朗: 高齢化社会と交通法. 第31回シンポジウム, 交通法研究, 29, 1-83, 2000.
- 16) 勝田亨, 岸田孝弥: 高齢者交通安全教育への新しい試み — 道路横断経路からみた交通安全指導について. 交通安全教育, 日本交通安全教育普及協会, 424, 6-11, 2001.
- 17) 鈴木春男: 高齢者の交通安全行動調査. その1. 調査の概況と高齢者の外出実態, その2. 運転の実態と対策, その3. 交通安全用品の認知と交通安全教育, その4. 今後の交通安全対策の在り方. 季刊; 交通安全, 総務庁交通安全対策室(監修), 1998.
- 18) 伊藤利之, 鎌倉矩子: ADLとその周辺 — 評価・指導・介護の実際. 医学書院, 東京, 2000.
- 19) 世田谷区役所: 閉じこもり・転倒の推計とリスク要因. 高齢者保健福祉ニーズ調査報告書, 世田谷区役所, 2001.
- 20) 金 憲経: 高齢者の生活機能の自立を目指す運動. 交通安全教育, 日本交通安全普及協会, 424, 19-24, 2001.
- 21) 水子学, 進藤貴子, 武井祐子, 福永夕紀子, 金光義弘: 高齢者の外出行動に関する調査研究 I — 「閉じこもり」に関連する要因の検討. 日本心理学会第66回大会発表論文集, 66, 259, 2002.
- 22) 進藤貴子, 武井祐子, 水子学, 森本祐子, 金光義弘: 高齢者の外出行動に関する調査研究 II — ライフイベント体験と外出行動との関連. 日本心理学会第66回大会発表論文集, 66, 260, 2002.
- 23) 金光義弘, 進藤貴子, 武井祐子, 水子学, 三野節子: 高齢者の外出行動に関する調査研究 III — 遠出外出志向性および危険行動傾向と関連する要因の検討. 日本心理学会第66回大会発表論文集, 66, 261, 2002.

(平成16年10月30日受理)

**Questionnaire Surveys on Going-out Behaviors of the Aged at Home
— An Analysis of the Related Factors in their Far-outing
Desires and Risky Behaviors —**

Yoshihiro KANEMITSU, Takako SHINDO, Yuko TAKEI, Manabu MIZUKO and Setsuko MINO

(Accepted Oct. 30, 2004)

Key words : elderly people, going-out behavior, far-outing desire, risky behavior

Correspondence to : Yoshihiro KANEMITSU Department of Clinical Psychology, Faculty of Medical Welfare
Kawasaki University of Medical Welfare

Kurashiki, 701-0193, Japan

(Kawasaki Medical Welfare Journal Vol.14, No.2, 2005 425-428)